おっぱいプリズン！

Under.2（地下２階）

～Ｚカップ魔乳よがり泣き！！絶頂封印・乳腺限界膨張責め！！～

<前回までのあらすじ>

あるファンタジー世界――レオン王の治世２年目、アヴァロン帝国に大事件が起こる。筆頭参謀にして帝国魔術師ゼムセルが王国に叛旗を翻し、宝物庫から『黄金のスカラベ』という魔法のアーティファクトを奪取し、伝説の魔王ガタノゾアの眠る地下遺跡に逃げ込んだ。魔術師は迷宮の入り口に、Ｇカップ以上の爆乳を持つ女でないと入れない「入場制限」の魔法を掛け、乳責めに特化したモンスターやトラップを配置した。

ルイ・メインベールは、豊穣神ティツに仕える神聖なる巫女にして、皇帝陛下直属の爆乳秘密部隊「麗乳隊（バストール）」の一員である、戦うシスターである。身長１７４センチ、Ｂ２４０センチ、Ｗ７０センチ、Ｈ１１２センチの超ダイナマイトボディを持つ、女神のごとき美貌のＺカップ淑女である。長い金髪と青い瞳、ミルクのように匂い立つ白磁の肌で、スリットの入った青い法衣を身に纏い、悪党には容赦なくバトルメイスをその頭に叩き込む。偉大な戦士パールニアの血を引くルイは、皇帝の命でゼムセル抹殺のため地下迷宮に降りた。

しかし、そこは想像以上に怖ろしいダンジョンと化しており、地下１階にして、ルイはその乳房を徹底的に弄ばれる。乳肥大化の改造ビームを受け、身動きの取れなくなったところを飛乳虫に襲われ種付けをされ、媚薬魔獣とも呼ばれる女体調教ホムンクルス・マッドリーチの触手１００本責めで、死の淵まで追い詰められる。

何とか生き残ったものの、バストは１２４センチから２４０センチもの超巨乳に肥大化し、感度は常人の１００倍という、大きなハンデを背負ってしまう。しかも武器と盾を失い、丸腰のまま地下２階への階段を下らねばならないのだった。

――地下１階を遥かに超える、乳拷問が待ち受けているとも知らず……。

地下２階は、アンデッドが支配する階層だった。
腐臭が漂い、白骨死体の群れが石床を埋める。迷宮のあちこちで死者のうめき声が木霊し、お化け屋敷のようにゾンビや、死んだ犬が飛び出してくる。死者の声は、あるときは恨めしく、あるときは怒りに満ち、またあるときは悲しげに響くのだった。ゴーストの救われぬ魂が、透明な気流のごとく漂い、生きる者を恨めしげに見つめては消える。
濁った空気は生者の存在を拒み、石に囲まれた迷宮そのものが死者の憎悪を秘めるかのごとく、嫌な圧迫感を入り込む者に与えるのだった。
『おおおお……！！』
「てゃあああ！！」
迫りくるスケルトンの群れと、青い法衣を纏う美貌のシスターが戦っている。シスターは武器を持たず、その美脚で敵の足を砕いて動きを止め、膝を折ったところを頭部を砕いて息の根を止める。その舞うような優美な戦いぶりと、骨をも砕く美脚の破壊力は驚嘆に値する。
突出した大きな胸部を、ぶるんっと魅力的に水平に揺らしたかと思うと、その遠心力を力に変えて、強烈な一撃が、動く白骨死体をバラバラに砕く。
「はぁあ、はぁあ、はぁあ……！」
爆乳シスター・ルイは、肩で息をしていた。２４０センチもの超巨大バストである。肩が凝って仕方がない――などというレベルではなく、胸がこれほど大きく恥ずかしく実ると、胸の重量がその動きを鈍くし、戦いにも精彩を欠く。胸が邪魔だと、これほど思った事はない。
さらにトゲトゲメイスも失い、徒手空拳で地下２階に降りてきたのだ。スリットの入った青い法衣は美脚に映えるが、武器は現地調達するしかない。
「たあああ！」
『グオオオオ』
ルイの胸に群がろうとするスケルトンに、また強烈な一撃。腰骨が折れ、地面に崩れ落ちる白骨死体。その白骨死体が持っていた、錆びた大昔の剣をぶんっと廊下の向こうに投げ、最後の一体の頭を砕いて確実に仕留める。
たぷんっと、胸が揺れる。
「ふうう……。スケルトンくらいなら武器なしでも戦えますが、もしまたマッドリーチのような強力なモンスターが現れたら……今度こそ危ないかも知れません。早く武器を手に入れないと」
ルイは額の汗をぬぐい、はしたない、と思いながらも法衣の胸元を開き、ぱたぱたっと風を送って戦いの熱を冷やす。大きすぎる胸の谷間が、汗で湿っていた。
マッドリーチ――その名を口にするだけで、地下１階での、人知を絶した肉体調教が思い出され、

恐怖に青ざめる。あの恐るべき人体改造、ぬめぬめした触手の魔の手、そして女に生まれたことを後悔するような、信じがたい肉の快楽……じゅん、とルイの性感帯が熱くなる。法衣に包まれた胸の先端が、少しだけ硬さを増す。
「な、何を考えているの、私は。神よ、お許し下さい」
　慌てて居ずまいを正し、巨大胸の前で十字を切り、神の名を唱えるルイ。
「女神ﾃｨﾂよ、お守り下さい。この小さきしもべに、勇気をお与え下さい」
『うううう……』
　まるでその祈りに誘われるかのように、またスケルトンのうめき声。どこ？　振り返ろうとしたルイの美脚に、先程、腰骨を砕かれたスケルトンが絡みついてきた。
「ふんっ！」
　ぐしゃああ！　腐った骨が潰れる嫌な感触が靴底に感じられる。しかし次の瞬間、胸の先端にしびれるような甘い快楽が閃く。
「あんっ！？　な、なに？」
　骨を砕かれたスケルトンの腕が、しつこい痴漢のようにルイの巨大胸を掴み、もみもみっと満足そうにもんでいた。腕だけでも動くのが、不死系モンスターの強靭さである。
　ルイが慌てて弱点の胸から、ふらちな腕を引っぺがした瞬間、後頭部に鈍い痛みが飛来した。ごつんっと、げんこつを受けたような痛み。反射的に美脚が一閃し、背後にいたスケルトンの頭を粉々に砕く。
　ぐにゃり、と視界が歪み、ルイの膝が笑う。
（い、いけない……こんな場所で気を失っては。ま、まだ油断は出来な……ああ……っ）
　後頭部への打撃で、脳が揺れたのだろう。脳しんとうを起こしたシスターの体が大きく傾いたかと思うと、自らの意志に反して白骨死体の山の上に倒れてしまう。
　そして、そのまま意識を失う――。
　かつーん、かつーん、と迷宮の床の上を歩く、少女のような足音を聞きながら……。

2

　ルイが目を覚ますと、黄金の宮殿のような場所にいた。
　壁は一面金の壁紙が貼られ、太陽と星々を模した優美な意匠が全体に施されている。天井は見えないほど高く、魔法の照明がほのかに青白く灯っている。壁に掛けられた燭台には赤い蝋燭が灯り、じりりと炎が揺らいでいる。

呆然とするルイの眼前には、大きな階段と立派な玉座があった。

いつ迷宮から抜け出したのだろうかとルイは本気で錯覚した。――しかし、そこはやはり恐るべき地下迷宮2階の中なのだった。

「やっと目が覚めたか、薄汚い帝都の牝犬め。さあ、服を脱げ」

玉座の上から、高圧的かつ命令的な口調で、少女の声が掛けられた。

「だ、誰ですの！？」

黄金に輝く玉座に、崩れた格好で腰掛けるのは、若い褐色肌の少女だった。非常に整った顔立ちの美少女で、しなやかな肢体は抱きしめたら折れてしまいそうなほど細い。上質な白い絹の衣装を纏い、黒髪おかっぱの頭の上には金の王冠を戴き、人頭を模した不気味なデザインの杖を、その手に握っていた。

外見は少女だが、それがただの少女に見えないのは、ルイほどの戦士でなくとも全身にびりびりと感じる強大な魔力と、邪悪な風貌が所以だった。

褐色の少女は、偉そうに玉座の上で脚を組み替えた。

「わらわの名はゼノビア。ゼノビア・エクレシア・ベイルモート・バロン。この高貴なる名を畏怖し、この美しき姿を畏敬するならば、ただちに我が前にひれ伏せ。貴様は偉大なる女王の前に立っているのだぞ」

「ゼノビア？　まさか……」

ルイは絶句した。

ゼノビアの名を知らないはずがない。その話が本当だとすれば、目の前にいる少女は100年前、バロン王朝の御世に、皇帝の冠を戴いた、史上最悪の女帝である。

ゼノビアはバロン王家の流れを組む下流貴族のベイルモート家に出生した。私生児だった彼女は、幼少の頃から下っ端の召使いのような仕事をさせられ、粗末に育てられた。教育も満足に与えられなかったはずだが、持ち前の叡智と好奇心が彼女を何とか勉学につなぎ、文字や歌や図形を学んだ。

ゼノビアは正統な子ではなかったため、正妻に憎まれており、ある日の食事中、事故を装った燭台に押し潰され、顔半分に醜い火傷の痕を負った。もともと暗かったゼノビアはそれ以来、一層塞ぎこみ口数も減り、孤立していった。彼女は己を憎む母親の気持ちをひしひしと感じていた。その憎悪から少女は己の身を守るため、黒魔術に没頭していった。彼女が得意とした歌や図形を描く能力が、美しい芸術的な目的ではなく、死者を蘇らせ従わせる死霊術として結実してしまったのは非常に不運であった。一人の少女にとっても、国にとっても。

西国との戦争に敗れたバロン王朝の皇帝は、敵地で無念の惨死を遂げると、後継者争いで国

は一層乱れた。城のあちこちで暗殺や血生臭い事件が起き、有力な後継者が消えた後には、遠い血縁のベイルモート家が残った。この時ゼノビアの父はこの世になく、その妻や親族達も流行り病で死亡していたため、正統な順列に従い、ゼノビアが13歳で女帝となった。

しかし顔が醜かったため、彼女は顔半分を隠す仮面を被っていた。この仮面を付けた時、すでにゼノビアの心は半分人間のものではなくなっていた。

――ゼノビアの父とその親族、そしてあの憎らしい母親面をした女は、皆ゼノビアが毒殺したのだった。彼女のさい疑心は数年でさらに育ち、誰一人信じることのない不信の塊となっていた。

憎しみに育てられた彼女の魔力は凄まじく、自ら軍隊を引き連れて西国を追い出すと、周辺の国々に戦いを仕掛け、そのことごとくに勝利した。

やがて西国を滅ぼし、その版図を組み入れた帝国は財と栄誉を手中にしたが、国内では無実の者達が女帝暗殺を企てたとして、毎日のように処刑場に血の雨を降らせた。

彼女の治世は誇り高き帝都を、恐るべき地獄絵図に変えていった。

やがて叛乱が起きるが、この時ゼノビアはすでに自らの肉体を殺し、アンデッドの女王として覚醒していた。彼女が率いる死人の軍団と、その不死の肉体、絶望的な魔力の前に叛乱軍は苦戦を強いられたが、数年に及ぶ粘り強い抵抗の結果、ついにゼノビアは討ち取られた。その不死の肉体はバラバラに切り刻まれた後、数十日にも及ぶ火あぶりの結果、灰も残さずこの世から永遠に消え去った。

こうして帝国史の中に、暗黒の歴史を刻んだ不吉な女王伝説は終わりを告げたかに見えたが、実はゼノビアは完全に滅んだのではなかった。彼女はアンデッド化する時、己の魂を『ある物』の中に封印していたのだ。その『ある物』が何であるのかは誰も知らない。しかし、それが破壊されない限り、不死女王の野望の炎は消えないのだ。それが彼女の不死たる証だった。

彼女は肉体を破壊されても、何度でも蘇る。もう仮面はいらない。あの時はまだ半分は人間であったが、アンデッド化した今となっては、彼女は以前の美しい風貌を取り戻していたが、火傷よりずっと醜悪な悪魔の笑みがその美貌に張りつき、もう仮面では隠せない邪悪な風貌に変わっていたからだ。

目覚めの時を待っていたゼノビアを起こしたのは、謀反人ゼムセルであった。彼は王家の秘宝『黄金のスカラベ』の力で不死女王を蘇らせ、この地下2階の防備にあたらせたのだった。

ゼノビアは非常に美しく、そのトパーズのような群青色の瞳に見つめられれば、同性でも気が騒ぐ。彼女は人頭の杖を床につき、りんっと張る美しい声で、ルイに命令を下した。

「わらわの地位が分かったならば、ただちに平伏せよ。そしてわらわに永遠の忠誠を誓い、我が下僕となれ。服を脱げ、牝豚」

　ルイは褐色少女を睨んだ。
「私の主は、レオン１世陛下ですわ。１００年も前に死んだ、邪悪なアンデッドの女王などではありません！　さっさと地獄にお戻りなさい！」
「ふん。豚の分際でわらわに逆らうか？　立場を思い知らせてやろう」
　ゼノビアの杖が黒く光ったかと思うと、青白い『電撃魔法』が火の矢のごとく杖の先端から飛び、ルイの巨大な胸部を貫いた。
　歴史に残る強力な魔導師は、詠唱なしで魔法を発動できる者もいるという。
「がはっ！？」
　乳房を灼かれる激痛が、ルイの膝を折る。今の彼女には武器も鎧もない。破れかかった青い法衣がかろうじて肌を覆っているに過ぎない。防御力はゼロだった。
「生意気な豚めが。わらわの前にひざまずけと申しておるのだ。抵抗は許さぬ」
　バチィ！！　再び杖が光り、強力な雷撃の魔法がルイの胸を焼く。さらに威力を増した三発目が胸を貫き青い火花を散らすと、もうルイは白煙を上げて倒れるしかなかった。
　弱点の胸に、立て続けに雷撃魔法を三連続である。どんなに屈強な体力自慢の勇者でも耐えられない激痛と、ルイにしか分からない屈辱が彼女のプライドを灼く。
「ぐおおお！！……胸が、胸が焼けるぅ」
　巨大な乳房を両手で掻き寄せ、苦痛に床の上をのた打ち回るルイ。
「ふふん。そうじゃ、貴様はそうして床を虫のように這い回っておるのが似合いじゃ。わらわの前に平伏せよ。人間らしく振る舞うことは許さぬ。貴様はわらわが拾った人型の豚じゃ。わらわの前で余興をせよ」
「ふぐうう。よ、余興ですって……？」
　苦痛に美貌を歪めながら、ルイはうめく。
「左様じゃ。あの帝都の魔術師――ゼムセルは迷宮の最深部で、魔王ガタノゾア様を復活させる儀式を行っておる。奴もまあまあの魔術使いのようじゃ。やがて魔王様の産声が、福音のごとく迷宮に鳴り響くじゃろう。
　さすれば地上は暗黒に陥り、人間どもは皆殺しにされ、帝都は再びわらわの物となる。その帝都には死した民が住まい、全ての国民がわらわに永遠の忠誠を誓うのじゃ。恒久の都と、不死の民と、永遠不滅の絶対王者……それこそ我が望む世界。誰も我を裏切らぬ完全なる世界じゃ。その輝かしい日が訪れるまでの退屈な時間、現在の腐った帝都の巫女である貴様に、余興を務めてもらおうと思ってな」
　額から玉の汗を流し、苦しみながらも立ち上がろうとするルイの胸に、また雷撃が落ちた。声にならぬ絶叫をさけび、胸から崩れ落ちる。

「頭の悪い豚じゃな。貴様が立ち向かえる相手に見えるのか、この不死女王ゼノビアが？　頭は悪いが、貴様の胸には惹かれるわ。その人間離れした醜い乳房、肉体改造の結果であろう。それも普通のレベルの改造ではない。よく正気を保ったまま、この地下２階に踏み込んだものよ。

しかし……この階層はわらわの守護するエリア。貴様が踏み越えられた上階とは比較にならぬ乳拷問が、これから貴様の胸に降りかかるのじゃ。どこまで耐えられるかの？　ガタノゾア様の復活の時まで――その暗黒の宴の時まで、死なずに余興を務めてくれれば重畳じゃが。くくく」

サンプルはここまでになりまーす♪

続きは是非、本編でお楽しみ下さい♪